


として見易からんが爲也

○歌ひ出しの鼓歌風の節も見易からん爲假りに小節に配したり

○  は特に滑らかなる節廻しを示す

○ 歌詞は音字一致に記せり

○  は蠟管の發音不明の箇所

(謄写版(横書き))

(五) 採譜

日誌に見るように邦楽調査事業は五線譜による採譜から始められた。採譜担当には三宅延齡(四十年十月より。当時研究生)、鎗田倉之助(四十年十月より十二月まで。当時研究生)、続いて林蝶(四十一年二月より。当時女子高等師範学校教諭)、本居長世(四十一年四月より。同年三月本科卒業して研究生)、楠美恩三郎(四十一年十月より。助教)、前田久八(四十二年四月より。助教)、竹内平吉(四十三年四月より。同年三月本科卒業して研究生)、弘田龍太郎(大正四年一月より。当時研究生)、ほかに島崎赤太郎(大正六年十月より。教授)、北村季晴(大正六年九月より)や梁田貞(大正八年九月より。七年研究科修了)も加わっている。雅楽では東儀俊龍・多久寅・多忠基・奥好義ら楽人も直接記譜作業に携わった。なお大正三年一月に、記譜者募集に対して三人が応募している(二月二十一日日誌)が、名前を見出せるのは約二週間のみで以降は未詳である。

毎回の具体的な採譜内容は日誌(記録用特製用紙)に記録された。明治四十年十月一日より昭和三年三月十四日まで、二十二冊が残る。なおこれとは別に作業(採譜その他)、出欠などを記したいわゆる日誌が十二冊ある(明治四十年九月から大正元年九月まで一冊、大正四年から十四年まで十一冊。東京音楽学校用箋)。各種目とも毎週一回、午前または午後に行われていた。採譜は蓄音機吹込みからも試みられた(大正七年に北村季晴の蠟管採譜を例に記譜法について協議し(二月十二日日誌)、その後清元節、一中節、河東節、民謡などを採譜している)。

本項では採譜された五線譜を収載する余裕がないため、左に各種目の担当者・期間など、また採譜された曲名と楽譜の現存状態(A~D)を示すにとどめる。記譜者はおもな担当者を記す。

A(浄写済。未定稿(「未定稿」と押印)を含む)、B(鉛筆書でほぼ完成原稿のもの)、C(未完成)、D(調査されたが所在不明のもの)。関連の記載がある場合は括弧内に付記する。なお弘田により浄書された楽譜が、全曲ではないが別に日本近代音楽館(弘田龍太郎関係資料)にも所蔵されている。

《富本節》採譜作業の初日は富本節「年朝嘉例壽」で、明治四十年十月一日(火)より開始。演奏の囑託員は吉野萬太郎(六代名見崎得壽齋)、記譜者は三宅(大正六年まで)が中心となり、本居(四十一年四月より大正四年)、ついで竹内(四十三年より大正元年十月、四十三年九月十二日より専門分擔(日誌)として三年間)、弘田(大正四年。浄書を目指して十二・三年度も)が担当。なお吉野は大正六年七月三十一日に死去し、七月二日の作業が最後となった。そのため大正十二・三年度は名見崎多賀の協力を得て再調査が行われた。昭和二年五月二十日(日誌)に全部整理済(弘田)の記載がある。

[A] 幾菊蝶初音道行・新曲高尾懺悔・草枕露玉川・百夜菊色の世中(關寺小町)・拙筆力七ツ伊呂波(乙姫)・其俤淺間嶽 上・年朝嘉例壽・御代榮益穂富種(未定稿)・奈須野(未定稿)・家櫻(稿)・惠方十産(未定稿)・松風(稿)・行平徒髮戀曲者(未定稿)・春夜障子梅(未定稿)・御代の秋

[C] 長生の富貴・夫婦酒替らぬ仲中(鞍馬獅子)・神樂獅子
《一中節(都派)》明治四十年十月二日(水)より、「辰巳の四季」の採譜で開始。囑託員は伊藤樸太郎(十代目都一中)、記譜は三宅と鎗田で始め、四十一年より三宅(大正二年七月まで)と本居(大正三年まで)で、さらに四十三年四月に竹内(四十四年五月まで)が加わった。大正二年十月からは前田(六年まで)に代わる。作業は六年までで、十

三、四年に浄書の為に弘田が再調査している。昭和二年五月十二日(日)誌に「全部整理スミ」とある。

(A) お夏笠物狂・道行三度笠・狸々・吉原八景(花紅葉錦廓)・頼光
山入段・天の網島・道成寺鐘供養丹波・與作夢路駒・皇月前道行・信
田妻・尾上の雲賤機帯名寄・園生松・辰巳の四季・鉢の木・夕霧
淺間獄・所作の切天人羽衣・廓の壽(未定稿)

(B) 傾城淺間獄・源氏十二段・頼光衣洗の段・頼光童子對面の段・
松羽衣・御代の秋(都太夫一中・菅野序遊合作)・甲子(未定稿)

(C) 源平妹背の鶏合

(D) 松襲

《平曲》明治四十年十月七日(月)より「那須與一」。嘱託員は館山漸之進。採譜開始に先立って「大原御幸」と「月見」を語っている(十月一日(火)日誌)。記譜は三宅(四十二年まで)と鎗田で開始するが、鎗田は初日の日誌に「記譜至難のため進行極めて少無し」と記している。鎗田に代わり四十一年四月より本居(四十二年まで)。四十一年十月調査方法についての協議があり、出席者の楠美恩三郎が十二月より加わり、四十二年後期からの記譜は楠美のみで行なう。作業は大正二年まで。なお前田流に次いで波多野流を予定し、明治四十三年八月、京都に藤村検校性禪を高野が訪問している。しかし藤村検校が翌年五月に死去した為採譜は実現しなかった。採譜は語りの部分のみ。

(A) 木曾最期・内侍所都入・訪月(八坂流。未定稿)

(C) 那須與一

(D) 腰越・延喜聖代・都遷・(灌頂)女院御出家・(灌頂)大原入御

《清元節》明治四十年十月十一日(金)より「保名」を採譜。嘱託員は岡村庄吉(五代目清元延壽太夫)。三味線方の清元藤吉(四十一年)、二世清元梅三郎(のち三世梅吉。四十二年より)、清元吉太郎(大正四一年)も協力。記譜は当初鎗田が担当したが、間もなく三宅が加わり、四十二年より三宅・本居に代わる。「四十三年九月十二日より専門分擔」で三宅が主担当。作業は大正四年まで(五年一月より七年三月まで岡村の

長期欠勤による)。延壽太夫実演採譜と蠟管からの採譜による「保名」(一部分)の比較譜を作成し、記譜法を協議している(大正七年)。

(A) 榮能春延壽(長生)・梅の春・初霞淺間獄・北州千歳壽・深山櫻
及兼樹振(保名)。「清元延壽太夫吹込蠟管より記したるもの」
「北村季晴作譜」・大和の手向五字(子守。未定稿)・御名残押
繪交張(鳥羽繪。未定稿)・玉兔月影勝(未定稿)

(B) 老松・名寄の壽(未定稿)・青海波ノ追分

(C) 色彩間刈豆(かさね)・再春松種蒔・佃(合方)

(D) 四季三葉草

《一中節(菅野派)》明治四十年十月三日(木)「松襲」で開始された。嘱託員は菅野藤次郎(四代目菅野序遊)。大正六年からは「浄書ニツキ當分新調査ヲ中止シ時々必要ニ應シテ出勤ヲ請フコトヲ談合ス」(一月二十六日日誌)とある。記譜者は三宅(四十二年まで)、次いで本居(四十一年より)と前田(四十二年より)が加わり、四十三年以降は前田が「専門分擔」として担当。なお菅野は大正八年九月二十三日に死去したため、十五年に集中して行われた浄書は、菅野たか子(名見崎多賀)の協力で弘田が再調査した上で完成させており、昭和二年四月に弘田により「全部整理スミ」となる(二十五日日誌)。大正八年一月に開始した「夕霞淺間獄」は蓄音機吹込みからの採譜(前田のほか弘田、北村、梁田の名が見える)。

(A) 萬屋助六道行・業平河内通・八重霞浪華濱秋(かしく)上 新

屋敷娘ノ下 墓所之段・常盤御前道行(菅野序遊ヨリ前田久八
樂譜ニトリタルモノナレトモ原稿未完成ナル爲メ不明ノ箇所多
シ。序遊病氣ノ爲原稿未完成ニ終リタルナリ。現今此ノ曲傳ラ
ズ、不明ノ箇所ヲ補ヒツ、淨寫シ終ル)・常盤御前妹が宿・泰
平船盡・鉢の木・鵜飼石和川・墨繪の島臺(江の島)・松盡し・
松襲・沖中川戀係・稽首國道行・尾波瀬の隠井(梅の由兵衛道
行)・神樂高砂自然・居土過去物語・二重帯名護屋結・安宅道行・三
勝鶉卵酒(未定稿)・高砂松の段(未完成、前半のみ)・夕霞淺

間獄(未定稿)「前田氏上譜」記/謄写版)

〔B〕江戸紫

《長唄》明治四十年十一月一日(金)から開始、めりやす(明の鐘・壽・もみじ葉)を採譜。嘱託員は石原廣吉(五代目杵屋勘五郎)。小林鉦太郎(杵屋五三郎。四十一年十二月より四十四年七月まで)が時おり代理を務める。四十四年十月以降は坂田政太郎(二代目今藤長十郎)が石原を引き継いだ。また劇場合方の調査には大正六年十月より坂田のほか細谷佶太郎(五代目六合新三郎)が参加(十年五月まで)。当初、記譜は鎗田が担当したがすぐに三宅(大正七年まで)が加わり、四十一年からは三宅と林(四十二年九月まで)に移り、間もなく本居(大正五年十二月まで)「四十二年九月十二日ヨリ専門分擔」となるが、大正四年以降は三宅が主)も加わった。竹内が四十三年より約一年間参加、その間劇場合方の「専門分擔」となるが、その後大正六年より北村が担当(十二年一月まで)。劇場合方調査は明治四十二年から大正十二年一月まで継続して行われ、昭和二、三年には弘田が浄書とするための再調査を行っている。また大正二、三年には一部出版に向けてまとめられている。

〔A〕(めりやす)東金・(めりやす)小夜千鳥・(めりやす)猫の妻・(めりやす)明の鐘・(めりやす)きしょう・(めりやす)びんづる・(めりやす)壽・(めりやす)黒髪(未定稿)・(めりやす)寶船(未定稿)・(めりやす)白妙(未定稿)・菊壽の草摺・枕獅子(狂いより切まで)、「大正五年十二月ヨリ大正六年一月

ニ至り京都市先斗町津田たみ二付調査(「三宅」)・櫻狩・亂菊枕慈童・英執着獅子・初咲法樂舞・範頼道行・藪入娘・心猿の秋の月・正札附根元草摺・末廣狩・童子戯面被・鷺娘・高尾懺悔・常磐庭・童獅子・御代の秋(二人翁)・月の貢(訂正あり)

〔大薩摩〕鞭櫻字佐弊

〔B〕新むらさき(めりやす)八重霞・(めりやす)四(ツ)の袖・五大力・ゆかりの月(林)と記名・初子の日(林)・初しぐれ(林)・(めりやす)禿(林)・(めりやす)三勝道行(林)・(めりやす)高尾(もみ

じば)

〔C〕傾城道成寺・老松(林)

〔D〕(めりやす)えびす・松の緑・京鹿子娘道成寺・七福神・勸進帳・菊の露・多摩川(さらしの合方)・雛鶴三番叟・様に逢て

〔劇場用合方〕

〔A〕金襖物(二十二例)・劇場用合方 金襖物 第一・三下り合方附竹笛入合方(二十四例)・劇合方 第一集 三下り合方)・修羅用合方の内立廻り(二十三例。未完)

〔B〕立廻り他(約九十例。用例場面の注記、楽器編成の記あり)

《河東節・半大夫節・外記節》明治四十一年九月二十八日(月)より「神樂獅子」で始める。嘱託員は伊東秀次郎(山彦秀翁)。記譜は大正四年二月まで三宅(四十三年九月十日ヨリ専門分擔)と本居(三年末まで)が携わり、四年以降は弘田に代わる。また五年二月からは弘田が伊東宅へ出向いて採譜。八年四月十一日伊東氏死去により、氏の採譜は同年二月十八日が最後となった。昭和二年三月二十一日に弘田により「調査ズミ楽譜全部整理ズミ」(日誌)。なお弘田はその後蓄音機吹込みから「灸すえ」を採譜している。

〔A〕助六廓家櫻・式三献神樂獅子上の巻・助六所縁江戸櫻・ぬれ扇・縛れ髪・松の内・鎗踊・水調子(未定稿)・河東節曲節集(未完)・御代の秋

〔半大夫節〕小鍛冶名剣の巻・〔外記節〕傀儡師

〔B〕〔外記節〕住吉踊

〔C〕式三献神樂獅子下の巻

〔D〕灸すえ

《能楽》採譜作業は明治四十一年十月十五日(木)に「西王母」で始められた。関連の調査はこれより先に同年六月十八日(木)の「能楽拍子調査」(七月まで四回)から開始している。嘱託員は川崎利吉(川崎九淵・葛野流大鼓方)、記譜者は三宅。三宅が欠勤した場合も川崎自身が校閲・調査を進めている。川崎の来校による調査は大正四年十二月二十

三日までで、翌五年からは松本長（宝生流シテ方）に代わったが欠勤が
ちのためか同年五月からは三宅が川崎宅へ数回出張調査している。松本
は五年二月十日（木）から出勤するが、「羽衣」を九月十四日まで八回
調査したのみで七年二月まで欠勤が続き、結局能楽の採譜は大正五年で
終った。（謡のみ五線譜採譜。笛・太鼓は唱歌。大小鼓は粒付に準ずる）

〔A〕融・船弁慶・三井寺・花月・羽衣・羽衣（クセ・キリ）・枕慈童・
西王母（未定稿）／以上笛なし。

次第・物着・鞆鼓・カケリ・序ノ舞・葛越シ・片越一聲・一聲
（本越シ）・イロヘ・早舞・早笛・破ノ舞・はたらき・樂・中ノ

舞（未定稿）・アシライ・下り端（未定稿）・眞ノ來序（未定稿）・
出端（笛なし）

〔B〕東北・龍田・田村・黒塚・蘆刈（未定稿）・高砂（未定稿）／以
上笛なし。

大小序ノ舞・神樂・男舞・眞ノ一聲・五段ノ次第（未定稿）・神
舞（未定稿）・大ベシ（未定稿）・祈（笛なし）

《箏曲》明治四十二年四月二十三日（金）より。嘱託員は今井新太郎
（今井慶松）。「八段替手」（『箏曲集』第四集予定曲）から始めたがす
ぐに『箏曲集』の第二編、三編の曲に移る。採譜は『箏曲集』出版に向
けて行われた。記譜は前田と三宅（四十五年まで数回。大正四年に「御
代萬歳」記譜）で始められたが、大正五年までは前田が担当し、六年以
降に島崎、北村が加わった。作業は大正十二年六月まで。

『箏曲集』関連曲
箏曲集第一編

〔A〕姫松／若竹・櫻・花競・螢・歌の道・落梅・弓八幡・手習・小
野の山・秋の七草・富貴の曲・雪の朝・東雲の曲・春の花・六

段の調
箏曲集第二編

〔A〕三つの船・雲の上・松むし・八段の調・榮ゆる宮・薄霞・友千
鳥・早春の興・美だれ・椿づくし

〔B〕初刷楽譜を曲毎に訂正用原稿化したもの。再版用か。
同 第三編（未刊）

〔A〕千里の梅・常磐の榮・玉川・かざしの雪・江の島・明石・七段
調・四季の友・松づくし・四段砧・櫻狩・越後獅子・六段調替
手／以上「出版準備ノモノ」として合綴。訂正あり。

同 第四編（未完）
〔B〕住吉・末の松・九段調・大和心・八段調替手

〔C〕奈須野
三味線譜（箏曲集関連曲以外の曲が含まれる）

〔A〕越後獅子・姫松・櫻・花競・螢・落梅・手習・六段・松むし・
薄霞・かざしの雪・江の島・春日詣（島崎氏原稿）・千里の梅・
紅葉の賀・子の日・からこと・ほととぎす・岡安砧・朧月

その他

〔A〕御代萬歳（生田流。山口菊次郎作曲）御代萬歳（山田流。今井
新太郎作曲。訂正あり）・御代の賑（今井作曲）・御代の榮（今
井作曲・訂正あり）

〔C〕末の契
〔D〕壽くらべ・須磨の曲

《常磐津節》明治四十二年四月二十七日（火）開始、曲は「子寶三番
叟」。嘱託員は常岡丑五郎（六代目常磐津文字太夫）。記譜は前田が担
当し、本居、三宅が稀に加わっている。作業は大正五年以降常岡の欠勤
多く、六年三月まで。昭和二年に弘田が浄書した。

〔A〕子寶三番叟・駕鴛容姿正夢（未定稿）・蜘蛛絲梓弦（未定稿）・
辰鴛色相眉・心中名残の鮫鞘（お妻八郎兵衛。未定稿）・四天王
大江山入（山姥）下の巻・戀中車初音の旅（忠信。未定稿）・御
代の秋

〔B〕老松（前弾き）・常磐津述語説明用楽譜（ギリノリ、引立ほか）

〔C〕傳授の雲籠・積戀雪關扉・忍夜戀曲者（將門）
〔D〕善知鳥

《新内節》大正元年十二月十一日(水)より「明鳥」を採譜。囑託員は小林文太郎(七代目富士松加賀太夫)、二年二月から小林鎌吉(吾妻路宮古太夫)が加わる。記譜は三宅と本居が担当し、作業は大正五年十二月まで。昭和二年に弘田が浄書。

(A) 伊達様阿國歌舞伎(累身賣の段)・千日寺名残鐘・明鳥夢泡雪
下

(B) 明鳥夢泡雪 上・若木の仇名草(蘭蝶)

(C) 道中膝栗毛赤坂竝木の段

《京歌》大正二年十一月六日(木)、「根曳の松」(三絃替手)の採譜より開始。囑託員は小井出とい。記譜者は三宅。十二月からは小井出宅に
出向して調査。大正三年十二月まで。

(A) 残月替手(三絃)・ゆかりの月・夕の雲・四つの袖・柳髪・八重衣替手(三絃)・融・高砂・舞鶴(丹頂の鶴)・くちきり・十三鐘(訂正あり)・八段替手(三絃)・ふところ・千鳥の友・梓・あらわれ草・鳥邊山(繁太夫節。未定稿)

(D) 根引の松(三絃替手)・梅の月

《雅楽》大正五年六月十二日(月)、拾翠樂(黄鐘調)、越天樂(平調)、酒胡子(双調)から開始。囑託員は東儀俊龍(大正十五年十二月まで)、多忠基(十年十一月まで)、多久寅(昭和二年三月まで)の三氏(当時いずれも洋楽器実技授業を担当)であったが、大正十一年四月から多忠基(十一年七月死去)に代わり奥好義(昭和二年三月まで)となる。記譜者欄には弘田・俊龍(五年から十一年四月)、弘田・俊龍・奥(十一年四月から十二年)、弘田(十三年以降)などと記される。弘田が記譜担当であるが、実際には各自が担当楽器を五線譜化して提出するなど共同作業であり、浄書の段階で弘田一人となったものと思われる。作業は必ずしも全員出勤によるものではなく、自宅調査もされ、また大正十三年一月東儀宅での調査を機に、十五年まで奥・弘田が東儀宅に出向いて行われた。なお短期間兼常清佐(当初から七年まで)も時おり出席している。採譜は五年六月からであるが、三月から記譜法などの調査が始める。

れていた。記譜法についてはその後も協議を重ね、七年四月末に「雅楽記譜法ノ扣」を作成し、七月に完成させている(翌八年七月に一部改訂)。

(A) 音取(壹越調 平調 太食調 雙調 黄鐘調 盤涉調) (大正八年七月三十一日調査済。東儀俊龍・奥好義・多久寅・弘田龍太郎) 記。以下署名同じ)

平調(越天樂(大正八年七月三十一日調査済))

壹越調(迦陵頻急(大正十三年十二月十七日完成))・賀殿急

(大正十三年十二月十九日完成)・壹團嬌(大正十四年四月二十三日完成)・菩薩破(大正十四年二月二十日完成)・春鶯

嚶入破(大正十五年四月)・蘭陵王(大正十五年四月)・胡

飲酒破(大正十五年五月)・酒胡子(大正十五年六月)・北庭樂

(大正十五年六月)・春鶯囀颯踏(大正十五年九月)・酒青司

(大正十五年十月)・武德樂(大正十五年十月)・新羅陵王

急(大正十五年十一月)・承和樂(大正十五年十二月)・賀

殿破(昭和二年一月)・回盃樂(昭和二年一月)・迦陵頻破

(昭和二年一月)・十天樂(昭和二年一月)・胡飲酒序(昭和

二年二月)・調子(昭和二年三月) / 日付は、「日誌」記載と必ずしも一致しない。

(B) 平調(裏頭樂・扶南・調子・陪臚・勇勝急(笛のみ)・夜半樂・相府連・春揚柳・三臺塩急・林歌・皇鹽急・萬歲樂)

雙調(酒胡子)

盤涉調(青海波・千秋樂・蘇莫者破・蘇(合香急))

壹越調(羅陵王破)

止手(壹越調 平調 太食調 雙調 黄鐘調(附水調) 盤涉

調/23例)

黄鐘調(鳥急・千秋樂・拾翠樂・喜春樂)

(C) (パート譜)

平調(鶉德・王昭君・小娘子・老君子・甘州・五常樂急・五

常樂序

盤涉調〔輪臺・越天樂・白柱・採桑老・劍氣揮脫・宗明樂・萬

秋樂破・蘇合香破・蘇合香三帖・竹林樂〕

黃鐘調〔越天樂・海青樂・西王樂破・青海波・平蠻樂・桃李花・

蘇合香急・央宮樂〕

雙調〔春庭樂・柳花苑・回盃樂・武德樂・胡飲酒破・新羅陵

王急・入破・鳥急・賀殿急・賀殿破・陵王・颯踏・鳥破・

北庭樂〕

太食調〔合歡鹽・長慶子・朝小子・仙遊霞・庶人三臺・輪鼓舞

脫・拔頭・傾盃樂急・還城樂・打球樂・蘇芳菲・武昌樂〕

〔D〕平調〔慶雲樂・五常樂破〕

〔蘭八節〕大正九年六月二日(水)より「道行相合炬燵」の採譜。囑託

員は高橋よし(宮園千春)。記譜は前田と梁田が担当、調査は翌十年七

月まで。高橋の死去(十三年七月)により、昭和二年楽譜完成に当り、

弘田が小林きん(宮園千香)に再調査している。

〔A〕道行相合炬燵(梅川)・鳥邊山・里の色絲

〔荻江節〕大正十年九月二十八日(水)開始、曲は「短夜」。囑託員は

荻江ひさ。記譜は前田と梁田(十一年まで)が担当。採譜は十二年六月

まで、のち十五年十二月より弘田が整理・浄書した。

〔A〕高尾・深川八景・竹・短夜・松・金屋丹前・夜半樂・梅

〔民謡〕レコードからであるが、大正十、十一年に梁田が採譜してお

り、十五年に弘田が浄書した。

〔A〕相馬節(「蓄音機レコードより」)・米山節(「同」)・警城平盆踊

唄(笛。「同」)・おいとこ節(「同」)

〈その他〉

オトシ・ナガシ

〔A〕菅野一中節(自然居士13例)・都一中節(夕霞浅間嶽6例)・常

磐津節(傳授の雲籠4例)・清元節(梅の春7例・浅間11例)・

新内節(明烏夢泡雪 上12例)・富本節(忠信16例)・長唄(鶯

カカリ

娘9例)・河東節(ぬれ扇12例)

〔A〕長唄(京鹿子娘道成寺10例・勸進帳14例)・清元節(浅間5例・

長生6例・玉兔5例・北州4例・梅の春4例)・河東節(ぬれ扇

4例・助六1例)・外記節(傀儡師1例・鎗踊1例・水調子1例)・

富本節(忠信8例・高尾懺悔3例・松風2例・家櫻三番叟1例)・

菅野一中節(自然居士・冲中川・江の島・業平河内通・稽首國

道行・八重霞浪華濱萩 上下・名護屋帯・江戸紫/以上各1例)・

常磐津節(將門2例)

〔B〕常磐津節(10例)・菅野一中節(11例)・都一中節(4例)

〔六〕録音

蠟管および平円盤に、調査中の曲あるいは奥浄瑠璃など招聘した研究
的種目を録音している。最初の録音は、明治四十一年二月二十二日の清
元「保名」であった。「蓄音機」と題する吹込み記録から年月日、曲
目、演奏者を記した「蓄音機吹込」を載せる。ただし「日誌」と多少異
なる部分があるので、先に日誌における当該部分を示しておく。

蓄音機吹込み

(1) 日誌

二月二十二日 土曜日

流名 清元

外題 保名

歌 岡村庄吉

三絃 清元榮吉

蓄音器 蠟管吹込